

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ (129)

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きししたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

女性の痛風がまれな理由

第31回日本臨床皮膚科医会総会から（平成27年6月20日）

50代女性で、両肘と手指のPIP関節に結節性病変があり、白色で粘性のある排出物を認め痛風結節と診断。尿酸が12.2 mg/dlと高値。腎結石を伴っていた。極度ののいそうがあり、10年前から神経性食思不振症と診断されている。極度ののいそうは高ケトン血症を伴うが、ケトン体は尿細管での尿酸再吸収を促し、高尿酸血症の原因となる。痛風はほとんどが男性で女性ではきわめて稀だが、エストロゲンが尿酸の再吸収に関与する尿酸トランスポーターの分解を促進するためと考えられている。女性の痛風は、男性より高齢で、腎障害や利尿薬が関与することが多いが、本例のように栄養障害に伴う例もある。

「そういえば、女性の痛風結節は記憶に残っていない。尿酸は抗酸化物質として働いている一面もあり、悪いことばかりではないらしい。ちなみに尿酸トランスポーター（URAT1）を阻害するのが、ユリノーム®（尿酸排泄促進薬）の作用点である」。

紅斑のない水疱だけの水疱性類天疱瘡はDPP-4阻害薬が原因か

第148回神奈川県皮膚科医会から（平成27年7月5日）

水疱性類天疱瘡（BP）の症例。BP180の

NC16a抗体は陰性だが、full-lengthのBP180抗原プロローブに対する抗体が陽性だった。糖尿病のためにDPP-4阻害薬を内服中で、中止と少量のステロイド内服で改善した。DPP-4は生体内で広範囲に発現しているCD26と同一物質で、CD26陽性T細胞は免疫調整に関与しているため、DPP-4阻害薬はBP発症の誘因になりうると考えられる。臨床的には緊満性水疱が主体で紅斑が目立たないのが特徴である。

「膝からのインスリン分泌を促進するのがDPP-4阻害薬の重要な作用点であるが、わかっていないことも多いようだ。自己免疫性疾患との関連は今後も注目する必要があるとのこと。なお、国外ではDPP-4阻害薬とメトホルミンの併用例でBPの発症が多いらしい。DPP-4阻害薬を内服する糖尿病患者は今後も増加すると思われ、注目したい」。

BPDAIによる水疱性類天疱瘡の重症度判定

第148回神奈川県皮膚科医会から（平成27年7月5日）

水疱性類天疱瘡（BP）が平成27年7月1日から厚労省の指定難病となった。調査票では、BPDAIによる重症度分類が用いられている。皮膚では水疱・びらん、紅斑のそれぞれの部位と範囲を、また粘膜では水疱・びらんの部位と範囲を、別々に120点満点の点数で表し、皮膚の水疱・びらんが15点以上、紅斑が20点以上、粘膜では10点以上

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス:

<http://www.asai-hifuka.com>

を中等症以上とし、医療費助成の対象とした。概要と調査票は厚労省のホームページで閲覧できる。

「難病指定に重症度の概念が加わって複雑になった。BPDAIの点数表は手元に置いて、参考にしていこう」。

Helicobacter cinaediによる蜂窩織炎

日本皮膚科学会第861回東京地方会から(平成27年7月11日)

両下肢の蜂窩織炎をきたした患者の血液培養から、グラム陰性螺旋状菌が検出され、*Helicobacter cinaedi*と同定された。イミペネム、セファゾリンなどの抗菌薬に対する反応は良好だが、再発をくり返した。*H.cinaedi*は主に免疫不全状態の患者に再発性の蜂窩織炎を起こす菌として近年注目されている。菌血症にもかかわらずCRPは低値の症例もある。

「基礎疾患のない整形外科領域からの報告もあるようだ。再発をくり返す症例ではこの菌も念頭に置く必要がある」。

Pterygium Inversum Unguis

第188回名古屋皮膚科懇談会から(平成27年8月1日)

Pterygium Inversum Unguisは、指の先端の爪床が爪甲の掌側にくっついている状態で、腹側翼状片とも呼ばれている爪の異常

で、先天性(家族歴のある例とない例)と後天性がある。後天性の中では、全身性強皮症などの膠原病に伴う例や、神経線維腫症やハンセン病に伴う例、爪強化剤などの化学物質が関与する場合がある。痛みを伴う例があり、病理組織学的にグロームス小体、末梢神経の増加が確認できる症例がある。

「このような疾患名で呼ばれているとは知らなかった。SLEの患者で典型的な病変を見たことがある。末梢循環障害が原因かと考えていたが、合併症からみれば末梢神経障害との関連もありそうだ」。

疥癬と末梢血好酸球

第11回加齢皮膚医学研究会から(平成27年9月6日)

疥癬患者の末梢血好酸球の話題。検討した31例で、好酸球5%以上が19例(61%)であった。ストロメクトール錠2回内服後では検討した26例中、好酸球5%は12例(46%)となり頻度は低下した。一方、同年齢群の皮脂欠乏性皮膚炎患者25例では、好酸球5%以上は7例(28%)であった。疥癬と皮脂欠乏性皮膚炎を比較すると、疥癬の診断は、好酸球5%での感度は58%、特異度は69%、好酸球3%では、感度77%、特異度34%、好酸球8%では感度35%、特異度96%であった。「ありそうでなかったデータだった。グレイゾーンの症例も多いので、補助的なマーカーになると思った」。